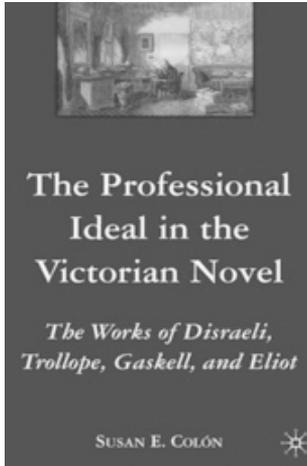


Susan E. Colón

*The Professional Ideal in the Victorian Novel:
The Works of Disraeli, Trollope, Gaskell, and Eliot*
Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2007. x+234pp.

波多野 葉子



本書はヴィクトリア朝プロフェッショナルリズムを、前近代的な非市場主義が形成した理念と近代的市場主義的理念との緊張関係のなかに考察している。ヴィクトリア朝中期の小説には専門職理念、および同理念に内在する問題を解決しようとする衝動が表れているとし、なかでも異なる信念の衝突により専門職が行う自己批判をディズレイリ、トロロプ、ギャスケル、エリオットの作品に探り、さらにオクタビア・ヒルの活動にフィクションと通底する要素を見出している。

第1章 “Brains More Precious than Blood, or the Professional Logic of the Young England Trilogy” は、ディズレイリのヤング・イングランド三部作に見られる、理想主義と物質主義間の緊張関係が統治に与える問題を探っている。ディズレイリはホイッグの優勢に対抗し、パターンリズムを実行するトーリーの貴族による統治を主張しヤング・イングランドを主導したが、コロンのように、彼は実際には専門職理念を信奉し、貴族が国を治めるのに相応しい資質を持つよう変革することを目的としていた。国家が出自に拘りなく人材を登用することで最高の立法府が成立するとの信念の下に、指導者に求められる資質として専門職と貴族双方の理念の結合を求めていたという。ディズレイリの主張は第一作の *Coningsby* (1843) と第二作の *Sybil* (1845) に敷衍さ

れ、準貴族の主人公が専門的訓練を受け能力により政治的指導者の地位に登る。しかし第三作の *Tancred* (1847) では貴族の尚武精神が復活し、専門職の物質的合理性に代わる宗教性が強調されているが、その試みは失敗しているとしている。

ディズレイリ主導のヤング・イングランドが中世主義の政治的表象であり、彼のトーリーの旧家偏重はよく知られているため、本章にはその題からして意表を突かれる。ヤング・イングランドは貴族的統治理念に専門職の規範を移入しようとしたとのコロンの論は独創的で、作品の新解釈の可能性を示唆している。

第2章 “‘Manly Independence’: Autonomy in *The Warden and Barchester Towers*” では、個人と組織双方の自治を主張したトロロブが、講演 “*The Civil Service as a Profession*” (1861) で、特に政府職員の自治を “the manly independence” として専門職には欠かせないものとし、ベンサム主義に異を唱えたことを挙げ、国教会聖職界を舞台とするパーセットシャー・シリーズの第一、二作で専門職組織内で個人が “manly independence” を保つ様を考察し、その中に伝統的な職業観と新興のベンサムの職業観の対立と融合を探っている。

The Warden, Barchester Towers (以後 *BT* と略記) は共に専門職の個人と組織の自治の両面を扱いながら、企業家的ベンサム主義と専門職理念を対峙させている。*The Warden* では、ベンサム主義の圧力を外部から受けた養老院長が教会の権威でなく自分の倫理観に従い、“manly independence” を保つ姿が描かれている。それは伝統的専門家が良心が許す範囲で功利主義的論理を受け入れる場合である。

BT ではベンサム主義が教会内部に入り込み抗争が起こる。ベンサムの理念を奉じる作品内の福音派は、個人の能力を昇進の基準にする価値観を聖職に持ち込もうとする。トロロブは台頭する専門職の能力主義を、内面的な能力である正直さや誠実さを蔑ろにするものとして糾弾する一方で、専門職理念の肯定的な例として、能力による選抜の理念を受け入れ、企業家理念を自らの「紳士的」行動に取り入れる元養老院長を描いている。また当初ベンサムの理念の下に下位聖職者の自治を制約しようとする元トラクタリアンの主

席司祭が、専門職としての牧師には管理ではなく自律が必要であることを悟る過程には、“manly independence”を行使しながら一員でいられる組織を理想とするトロロプの主張が反映されている。こうして良き聖職者は専門職的ジェントルマンであるとの考えのもとに、二人に伝統的精神と台頭する精神を融合させ、トロロプは新しい専門職理念を伝統的でありながら時代に再生可能なものとして提示しているとコロンは結んでいる。

パーセットシャー・シリーズ全体のモチーフは新旧勢力の抗争で、とりわけ第一、二作には伝統的な土地制度を基盤とする地主階級とそれに与する国教会の聖職者が、新興の勢力と田園の覇権を巡り争う様が描かれているが、コロンの論は教会内部の高教会派と低教会派の抗争が、1830年代と40年代のホイッグ政権下の改革の影響を受けていること等、現代のことに日本の読者が見落としがちなることを教えてくれる。また『自伝』に見られるように競争試験を批判し、パーセットではヤング・イングランドと軌を一にするトーリーの旧家偏愛を示したトロロプが、能力主義との融合を図っているとの主張は興味深い。さらにパーセット在来のトーリーで高教会派の聖職者と、ホイッグで低教会派の侵入者の軋轢を専門職の観点から論じる等、非常に新鮮でかつ情報量の多い論である。また本論はトロロプが当時の宗教界のみならず政治、経済、法律に通暁した上で作品を執筆したことを示している。

第3章 “Professional Frontiers in Elizabeth Gaskell’s *My Lady Ludlow*” では、社会の覇権が貴族から専門家による能力主義へと移る田園社会を考察すると共に、第一、二章で男性に限っていた専門職に中産階級の女性が参入する様子を考察している。前者については福音派の牧師が村の子供達の教育の必要性を巡りレディー・ラドロウと対立する様や、伝統的社会では存在すら無視された非嫡出児が牧師夫人となること、そして村の最下層出身者が最終的には牧師となり、Asa Briggs の言う英国の階級制度に特徴的な“limited fluidity”の一例となっている点などに、ギヤスケルの平等主義が表れているという解釈がなされているが、それは特に新しいものではない。しかし後者に関してはラドロウ家の事務を取り仕切るミス・ガリンドーの姿をフェミニズムの観点からのみならず、専門職という当時男性であっても伝統的な社会構造に変革をもたらした現象に女性の自立を絡ませて論じている点は興味深い。女性の

専門職従事に関しては、コロンは19世紀後半の女性の医学進出に触れ、そこに見られる能力主義に本作品での専門職拡大と通底するものを見出している。さらに作品中の女性の専門職参入を作品の語りの枠組みとなっている *Round the Sofa* の語りの構造に繋げ、ギヤスケルが報酬を得る専門的な労働、特に専門職としての女性小説家を頭に描いていたと主張する点は示唆に富み、新しい研究テーマを触発するものである。

第4章 “E Vero or E Falso? The Pastor as Mentor in *Romola*” では、作家が専門職としての能力を大衆の倫理と知性の向上のために使う必要性を論じた1870年代のエッセイ “Authorship” を取り上げ、エリオットが自らのメンターとしての役割を意識していたと指摘する。さらにコロンによると、エリオットは読者の牧者であることを作家に求めると同時に、教条主義に陥らないよう自己批判の必要性をも説いているが、それはロモラのメンターとの関係や成長と重なり、ロモラが最後のメンターの司牧精神を学び、ついには彼をも越える牧者となる姿に表れている。

しかしロモラが公的領域ではなく私的領域で司牧することは、非教条的司牧は政治とは相容れないことを示唆し、“Authorship” で社会を正せる執筆能力のある作家は出版する可能性が最も低い、と述べていることと重なる。つまり “Authorship” と *Romola* (1863) 共に専門家の司牧が大衆に与える可能性と課題を意識しており、専門職の理念と乖離する実際の能力にエリオットは悩んだが、それは作品でも未解決で終わると考察している。このように *Romola* をメンターシップの観点から論じた本章は、一般的に評価の低い本作品の新しい読みの可能性を示唆するものである。

第5章 “‘One Function in Particular’: Specialization and the Service Ethic in ‘Janet’s Repentance’ and *Daniel Deronda*” ではエリオットの専門職の服務倫理に内在する問題の取り扱い方、特に自己の破滅を招くほど極端に倫理に忠実な場合を考察している。福音派牧師が禁欲主義のもたらす自己犠牲ゆえに殉教者のように死んでいく様を描いた “Janet’s Repentance” で未解決の問題が *Daniel Deronda* では解決されており、両作品の基本的な概略は同じでありながら、後者の中心的課題はデロンダの職業的野心の実現であると主張している。前者ではプロフェッショナリズムを金銭的とし、専門職文化を急進的禁欲主

義と対立させているのに対し、後者では専門職的行動が純粹に天職意識を伴うことで解決を図っているとの論である。

またコロンは、エリオットはギャスケルより分析的であるが、両者共に能力のある女性が知的労働に従事する際の専門職理念との相克を描くと共に、専門職の職業倫理が極端な場合を問題視していると述べる。公共への奉仕のために自己破滅を招く登場人物はトロロプ、ディズレイリ、ディケンズには見当たらないことを挙げ、服務倫理の限界精査はドメスティック・イデオロギーにより自己抑制を強いられてきた女性作家の貢献であるとしている。

第6章“A Kind of Manager Not Hitherto Existing”では住宅改良家オクタビア・ヒルを取り上げ、これまで文学作品に見た問題を、歴史上の人物が理想主義と物質的世界観を調和させようとする決意のなかに考察している。ヒルは貧者救済というキリスト教的使命感を政治経済学の要素を持つ現実主義と結びつけたが、完全には現実主義を受け入れず、多くの事業で現実と理想の矛盾の解決に腐心した。慈善事業での報酬を拒否したことはその一例であり、専門的技量のある人物が能力に応じて報酬を受けるという経済的原理を、キリスト教的奉仕倫理と共存させることができず、その結果彼女が掲げた「ハート」と「ヘッド」の論理は対立し、両者を統合させる彼女の試みは不完全に終わった。

本書は歴史的、社会学的研究成果を取り入れ、専門職に関してヴィクトリア朝中期小説の提示する問題点を考察しており、同時期における専門職理念の形成という大きな枠組みのなかで、専門職理念に関する異なるテーマについて各章で論述している。それぞれ得るものが多い論であり、他の作家の作品も同じ視点から研究すれば有意義な成果が得られるであろう。またディズレイリはヤング・イングランドと、トロロプやエリオットに関しては、講演やエッセイと作品との関連性も探り興味深い指摘をしている。当然多岐に亘る先行研究に当たっているため注や参考文献も充実しており、次々と新しい研究テーマを示唆してくれる。一読をお奨めしたい著書である。

(筑波学院大学教授)

